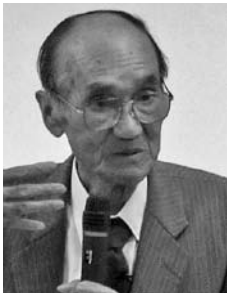
志賀重昂と郷土岡崎



岡崎地方史研究会
会長　**長坂　一昭**

ご紹介いただきました、長坂でございます。しばらくの間ご静聴いただければ大変ありがたいと存じます。

私が志賀重昂（しげたか）、志賀重昂（じゅうこう）とも言われますが、興味を持ち研究を始めたのは、教育委員会に鈴村教育長がおみえになって、岡崎の新しい、岡崎市史を作ろうという時期でした。私は指導主事でしたが、たまたま国際放映のプロデューサーの高林公毅さんと会いました。志賀に興味を持ってみえ、「三河男児歌」は、いつ頃出来たのかという話になりました。立派な三河男児歌碑は東公園にあります。

いつ頃、志賀がどういう気持ちで作ったか、ということにお互い興味を持っていました。志賀は雑誌『日本人』の発行に力を入れ、新聞にも記者として活動していたので、東京大学の新聞研究所に当たってみようということになりました。高林さんが行って調べてくれました。『みかは』という新聞があり、志賀が掲載したかも知れないと電話をくれました。しかし、新聞は研究所には所蔵されていない、リストに名前だけ残っている幻の新聞ということでした。それで、益々興味が湧いてきまして、夏休みに調べてみる気持ちになりました。

「みかは」新聞は、一色町で発行されていたと分かりましたので、一色の教育委員会で聞くと、「あると思うから、調べてみましょう」といわれました。町役場と医者の家にあると分かりました。嬉しかった。両方にあった新聞を合わせると補完できました。見てください。これが幻の新聞です。岡崎市立図書館の小林清司さんの協力でコピーし、図書館に入れました。

直言ノ功ハ一番槍ニ優ル一番槍ハ稍僥倖スベシ然ドモ直言ノ際ニハ主人ノ手討ヲモ計ラレザレバ也　徳川家康

みかは

紀元二千五百四十九年

明治二十二年十月一日　第九號

叔父君ノ獲玉ヒシ首モテヲノレノ斬リ取リシ物ト見セ大將ノ御感賞ニ預ラントハ平八郎ヨモ致サジ　本多忠勝

三河男児歌

予輩は頃日三河國の小年に居常吟味せしめ、暗々裡に其の志氣を養成せしめばやとて、試みに左の如き歌句を作りたり。請ふ一聞あらんか

汝不見段戸之山六千尺。絶嶺入天終古碧」又不見矢矧之水三十里。急湍噬石疾於矢」想昔孤軍據此險。欲唱勤王攘妖魔。借問當時將者誰。足助次郎臣重範」須臾賊兵勢如雷。千騎萬騎轟天來。吾軍奮戰支不得。七分死難三分潰」潰者忍辱隱龍疇。枕薪嘗膽欲報仇。機今到矣烈在。鬱々久待天定秋」嗟吁上帝之眼不曚朧。忽於玆土降英雄。段戸之山秀兮。矢矧之水潰兮。鍾靈孕出東照公」撥乱反正天所縱。維文維武賛皇猷。江戸開府統政敎。舜雨堯風六十州」何料治極人心弛。由來文恬又武熙。大勢取次趨西南。玆土佳氣長已矣」挽回豈無時。復興竟有期。嗟吁段戸之山爲誰高。矢矧之水爲誰號」三河男兒請往矣。三河男兒須奮起。

右の歌を賞蒙の爲め訓讀すれば左の如し。

汝見ずや段戸の山は六千尺。絶嶺天に奏はりて終古碧なり」又見ずや矢矧の水は三十里。急湍石を噬みて矢よりも疾し」想ふ昔孤軍此れ險に據る。勤王を唱へて妖魔を攘はんと欲す。借問す常時將たる者は誰れぞ。足助の次郎臣重範」須臾に賊兵勢ひ雷の如く。千騎萬騎天を轟かし來る。吾軍奮戰すれども支へ得ず。七分は難に死して三分は潰ゆ。潰ゆる者は辱を忍ひて隴畝に隱れ、薪を枕ふし膽を嘗めて仇を報ひんと欲す。機や到らず餘烈在り。鬱々として久しく待つ天定るの秋」嗟吁上帝の眼は曚朧ならず。忽ち玆の土に於て英雄を降す。段戸の山秀でたりや。矢矧の水潰りや。鍾靈は孕み出だす東照公」乱を撥さめ正に反へるを天の縱す所。維れ文維れ武皇猷を贊すべし。江戸府を開きて政敎を統べ、舜雨堯風六十州何んぞ料らん治極まりて人の心は弛み。由來文恬又武熙」大勢は取次に西南に趨き、玆土の佳氣は長へに已めり矣」挽回は豈に時無からんや。復興は竟に期有り」嗟吁段戸の山は誰が爲めに高き。矢矧の水は誰が爲めに號ぶ」三河の男兒よ請ふ往け往け矣。三河の男兒よ須らく奮起すべし。

此の歌句の意味に心して解せざる處多りたれど、夫〻の教師若くは父君兄君より聞き玉はれかし。

敢テ問フ日本人種ハ世界ノ歴史上ニ何等ノ成跡ヲ遺シタルカ。日本人種ハ世界唯一無二ノ事業ヲ成就シタルコアルガ。曰ク在リ。四箇ノ唯一無二ナル事業ヲ成就シタリ。

第一　鯨族ヲ漁獵スル敎戈ヲ世界ノ各人種ニ先チ初メテ製造シタルコ

第二　三百年ノ長歳月間泰平昭世（二三ノ小一揆ヲ除ク）ヲ成就セシコ

第三　二百年間ニ百五十万ノ人口ヲ保有セシ大都ヲ（江戸）創設セシコ

第四　全世界ニテ最モ金銀ヲ縷メタル建築物（日光廟）ヲ造リ出セシコ

然リ而シテ鯨族ヲ漁獵スル敎戈ヲ初メテ製造シタル者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ。三百年間ノ泰平昭世ヲ成就セシ者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ。二百年間ニ百五十万ノ人口ヲ保有セシ大都ヲ創設セシ者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ。全世界ニテ最モ金銀ヲ縷メタル建築物中ニ廟祀セラルヽ者モ三河ニ生産シタル人士ナリキ

「三河男児歌」は明治22年10月1日のみかは新聞に掲載されたのが初出です。そうすると志賀26歳の作です。「汝見ずや段戸の山は六千尺。絶巓天に参はりて終古碧なり。又見ずや矢矧の水は三十里。急湍石を噬みて矢より疾し」とあります。東公園の碑文はそうではないですね。「汝見ずや段戸の山は五千尺。雲巓天に参はりて終古碧なり」とあります。推敲を重ねたものが碑に刻まれています。詩吟をやる方が時々質問されます。「三河男児歌」は語句が違っているものを見ますが、どうしてかと。揮毫を頼まれる人が多く、時に推敲、修正されたのです。

彼が26歳の時、明治22年は憲法が発布され、翌年衆議院の選挙が行われる時期でした。三河の人も頑張れる時代になった、俺も三河の人々も頑張っていこうという気持ちを込めて作ったと思います。最後のところに「三河の男児よ須(すべから)く奮起すべし」とあります。

そして、志賀は、どうして「みかは」新聞に関係するようになったのか、と疑問が生まれてきました。編集者の太田伊八は、この時期に地方だけでなく、中央の状況を知らせてくれる人に執筆してもらわなくては広い視野の新聞報道を三河の人々に知らせることが出来ないと強く思っていました。東京で活躍する志賀さんに頼まれたのです。26歳の若い志賀さんが、これに応える力をどうして持っていたのかと疑問と興味が湧いてきます。今日に至るまで三十年余り志賀について研究を続けることが出来たのは、調べていくと、芋づる式にどんどんと、次のステップの疑問と興味が出てきますので、続けられるのです。志賀への尊敬が深まっていきました。

年表の方を見ていただくと判りますように、明治19年23歳の時に「筑波」という軍艦に乗り組み、豪州遠洋航海に行くとあります。「少年よ大志を抱け」で有名なクラークは去ったあとでしたが、札幌農学校を卒業しました。官立の大学です。一高にあたります東大予備門に入学しましたが、東京大学へは進まず、札幌農学校へ進学したのです。その当時には東京大学と札幌農学校しか大学はなかったのですが、授業料も寮費も国庫で給付してくれる制度があったので札幌農学校へ進んだのです。心のどこかに薩長藩閥の中央官庁での立身出世はできなかろうと思っていたかも知れません。

父重職（しげつね）が明治元年、京都の藩邸で病死しました。志賀5歳です。跡継が15歳未満のため家禄没収となり、母の手で生計を立てる貧しいもので、父の門人の援助で志賀は学校へ行けたのです。

志賀は農学学士なんです。やがて北海道大学になりますが、この当時には、新渡戸稲造、内村鑑三、宮部金吾等、東大同等、それ以上の秀才たちが在学していました。卒業して、長野中学校の教師になりましたが、酒席での県令（県知事）とのトラブルで、わずか1年で辞(や)めました。郷土の先輩、父の門人の小柳津要人（おやいずかなめ）が丸善書店の支配人になっており、小柳津さんを頼って東京へ行きました。丸善では和英辞書の出版を企画していましたので、英語のできる志賀は辞書の校正係になりました。札幌農学校の教授は、知っての通り、ほとんどアメリカ人です。丸善は洋書を輸入していましたので、外国の本を手にすることができました。志賀は、チャールズ・ダーウィンの『ビーグル号航海記』を読んでいたことが、チャンスをつかむことになりました。

海軍兵学校の卒業生の訓練航海がオーストラリア、ニュージーランド、ハワイなど南太平洋島々を巡航することを知りました。志賀は海軍省に同乗を願い出ました。今の中学校になりますか、攻玉塾へ行ったんですが、私立の学校ですが、海軍大学の教授をしておられた近藤真琴が校長で、偉かったんですね。英語をきちっと学習させるには幼年科の英語教師は、英語を母国語にしている人を先生にすべきだと思われ、アメリカやイギリスの人を講師にされました。志賀は少年の頃から本物の英語を学んでいたのですね。幼年科を卒業して、海軍兵学校へ進学する人が多く、兵学校の予備校といわれる程でした。志賀は『世界写真図説』の中で「日清の役黄海々戦の日本軍艦々長は殆ど悉く其の旧門下生に係る。攻玉社一私塾を以て、日露戦役の頃、海軍将官五人、佐官百五十人、尉官二百人…近藤真琴は実に日本海軍上の恩人なり」と書いていますが、海軍省には先輩、知人がいました。それと、進化論で有名なダーウィンがイギリスの軍艦に乗って南米や南太平洋諸島をめぐった実例を示して願い出たのです。好運に、軍艦「筑波」に乗艦することが許可されました。

オーストラリア、ニュージーランド、パプアやハワイに上陸して、現状を十分に視察したのです。本物の英語を学んだのです。聞く力、しゃべる力も十分です。外国人に通用するので、艦長や兵学校の生徒にとって志賀は通訳みたいな形にもなって有難がられました。単に航海したのではなく、現地の取材がいっぱいできたのです。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツなど欧米列強が侵入し、植民地となり、先住民は、まさに奴隷、骨抜き、蝉の抜け殻のようになっていたのでした。十か月の巡航を終えると、志賀は、すぐに執筆にとりかかりました。見聞と感想を書き『南洋時事』と題して出版しました。中央の出版社丸善から出版

したのです。一介の青年が丸善から発行できたのは、小柳津要人のお陰でしょう。それがベストセラーになり、25歳の青年志賀は一躍日本の文壇に彼の名前が知れ渡りました。一般の人々にも志賀重昂の名前が知られたのです。

志賀は、東京地学協会の会員に推薦されましたが、同じ考えの同志と一緒になって、明治21年4月に政教社を創立し、雑誌『日本人』を発行して、国の独立、精神の独立を論述しましたので、論壇の若い有名な執筆者になっていたのです。

だから、太田伊八がお願いしたのです。志賀は喜んで引き受けました。東京に居て、郷土の人々に自分の考えや政治や社会の動きを発信できる感激を詩にして掲載したのだと思いました。自分も奮起するし、三河の少年たちよ奮起しようではないか、という願いが込められていると感じます。「此の歌句の意味にして解せざる處があれば、それぞれの教師若しくは父君兄君より聞きたまわれかし」と志賀は書いています。郷土三河との関係を深くした志賀は、東京に出てきた学生を自宅から通わせますが、話を『南洋時事』にもどします。

南洋の島々の人々の生活で、自分の国を大事にしない、そういう姿を見てきたのです。それぞれ国の、あるいは国民のもつ良い所、これを大事に保持しなければダメだと志賀は思ったのです。その国の良いところ、長所を彼は「ナショナリティー」を「国粋」と訳し、この国粋保持の大切さを『南洋時事』に書き、雑誌『日本人』に論文を載せました。日本の持つ良さ、日本人の長所を自覚して、心の独立をしなければならないと論じるのです。心の独立、精神の独立があってこそ、その国が独立を保持し、発展していくのだというのですね。三宅雪嶺たちと『日本人』を発刊したのも、地方紙『みかは』の在京主筆となって、東京から記事を送ったのも同じ思いがベースにあったのでしょう。『みかは』は一色で創刊しましたが、一年後に日刊紙となり本社が岡崎に移りました。

東京に出てきた三河の人々の集まりに「三河郷友会」という親睦会があり、機関誌を出すことと、「本国青年ノ進路ノ便ヲ計ルコト」が目標にあり、志賀は自宅に下宿させて学校へ通わせていました。旧岡崎藩主の本多家は旧藩邸の一部を学生寮に開放されました。それを竜城館といいますが、志賀は主幹（館長）に推薦されました。

志賀塾や竜城館の学生たちと牛鍋をつつき、語り合い、一緒に遠足をしています。ここから人材が巣立ちました。

地元に帰って活躍する人、国や社会に活動する人が育っていきました。岡崎市長となった本多敏樹、名古屋市長の大岩勇夫、国産自動車製作の橋本増治郎、長野県出身ですが、王子製紙の藤原銀次郎といった人々など多くの人をあげることができます。

国の発展、国の進むべき道を思う志賀は文筆活動だけでなく、実際の政治にも係わっていきますが、筆を持つことは忘れませんでした。『日本風景論』から話したいと思います。

日本の誇るべきものとして、志賀は四季のある美しい風景があると思いました。美しい国土で生活しているのだと心から感じる時、国土を大切に思い、国のことを考え「心の独立」「精神の独立」が生まれてくると思うのです。花咲く春の色彩「美」、紅葉や秋草に見るさわやかな「瀟洒（しょうしゃ）」、波しぶきをあげる荒磯、渓流に見る雄大で万化する「跌宕（てっとう）」を要因に地理学的に、詩歌を入れて書いてあります。志賀31歳、明治27年に政教社から出版しました。京都大学の先生たちが選んだ『日本の名著』五十冊の中に入っています。今も岩波文庫で発行されていますので書店で手にすることができます。

では、政治活動の方に話をかえます。全国新聞雑誌記者懇談会の代表に推され、不平等な条約改正のため内地雑居、裁判官任用を認めようとする外交、軍費増大に反対する非政府六派の連合に力を入れました。憲政の神様といわれた尾崎行雄や後に総理大臣になった「話せば分かる」といって銃弾に撃たれた犬養毅（いぬかいつよし）らと協力して連合を成立させ、大隈重信を党首とする進歩党を結成しました。志賀は幹事、常議員に推されました。明治29年3月、松方正義に内閣総理大臣の大命が下りましたが、政党の協力が必要で、大隈の入閣を求め、民間や政党から人材を官に登用することを認めました。志賀は農商務省山林局長に抜擢されました。このままでは、日本の美しい風景が消えてしまう心配があり、風景を保存することをしなければいけないといっています。今から百年前に環境保全をいっていますよ、偉いですね。志賀は前を見ることのできる人だったのです。

志賀たちが念願していた責任内閣（政党内閣）が意外に早く到来しました。進歩党と板垣退助の自由党が合併して憲政党が成立し、明治31年6月、大隈重信を総理大臣に、板垣退助を内務大臣とする政党内閣が誕生しましたのです。志賀は外務省勅任参事官（参与官）に就任しました。東京府知事の肥塚龍と力を合わせ、マーカス島（南鳥島）を東京府の管轄と官報に公示したのです。これによって、アメリカ政府に対して有利に交渉することができたのです。当時は、何も取れない無人島なんかは政府も人々もどうでもいいと思っていたのです。領海となり、漁をするのにもいいし、無線などの中継所になり、

将来必ず領土問題になるから、きちっと日本の領土であると世界にいっておかねばならないと認識していたのです。

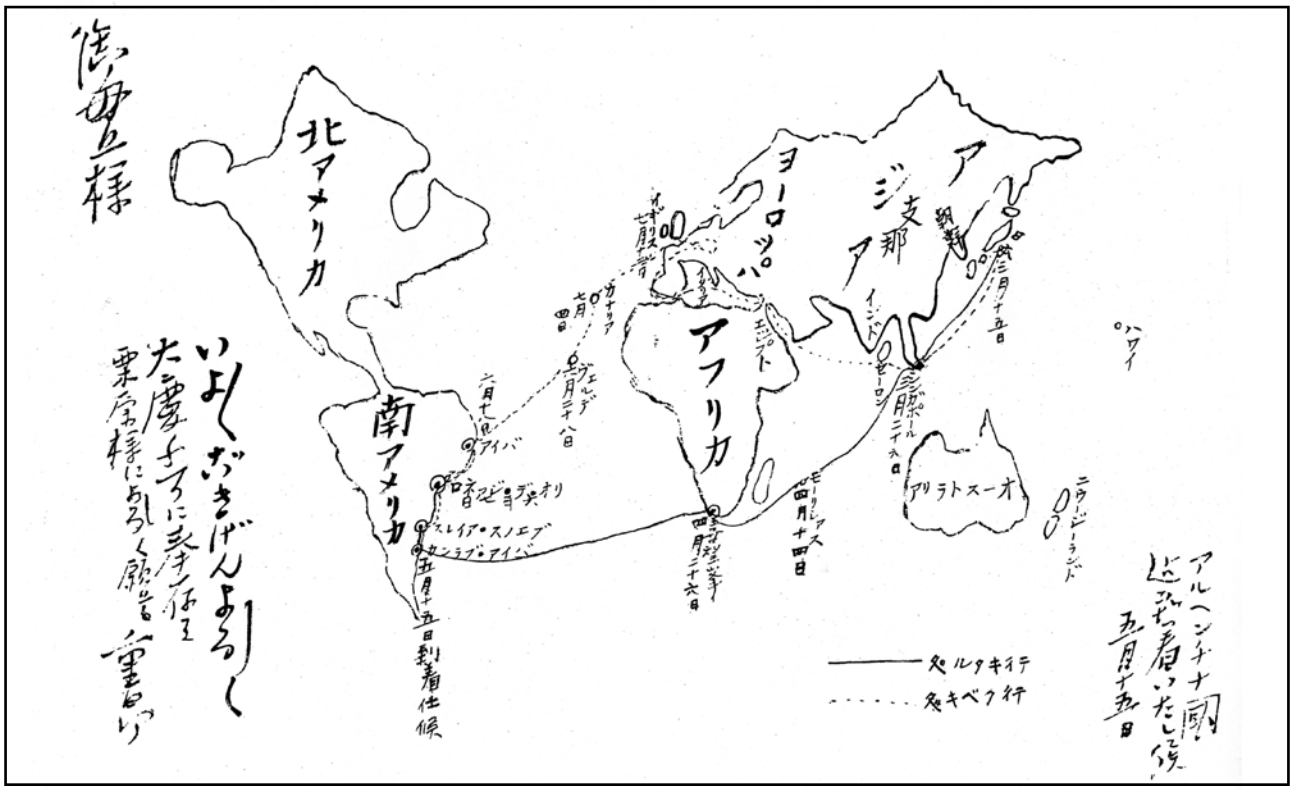
志賀は、こんな大事な仕事をしたのですが、役人生活は僅か八か月でした。山林局長は軍費増大に反対して四か月で辞任、外務省は進歩党系と自由党系が大臣ポストなど勢力争いで四か月で、最初の政党内閣は崩れてしまったのです。

伊藤博文は、政治は議会と協力してやっていく時代となったと感じていたので、立憲政友会をつくり、志賀を自宅に訪ねて入党を求めました。ロシア・フランス・ドイツの三国干渉、ロシア軍の満州（中国東北部）駐留、韓国進出と日本にとって政党や藩閥で対立しておる時局ではありません。伊藤博文が訪問して「国のために力を出してほしい」と勧め、志賀は立憲政友会に入党しました。薩長藩閥政治を批判していましたが入党したのです。愛知県から出馬して代議士に当選しました。2回当選しましたが、3回目に落選しました。地方の人は一生懸命選挙運動をしましたが、志賀は、あまり運動に来ないので、ついに落選となったのです。やっぱり、志賀は政治に馴染まなかったようです。「どうしても政治は蝸牛角上の争いになってしまう」といっています。カタツムリの角と角で争っているような、小さいことで対立して、国家とか世界を見ていないという不満を抱いていたのでしょう。政友会総裁となった西園寺公望（さいおんじきんもち）や地元が、ぜひもう一度立候補してほしいと要請しましたが、再び政界に入りませんでした。志賀は「一介の学徒」にかえって活動するのだといっています。地理学者・ジャーナリストに立ち返って、世界を見て提言すべきことは提言しようと決意したのですね。

志賀が衆議院議員選挙で落選した1か月前、明治27年2月、日露戦争が勃発していました。大本営が、軍が発表するだけでは戦争の様子は正確に国民に報道されないと思っていたのでしょう。意中の人に従軍して戦地の様子を見て書くように頼みましたが辞退され、志賀は従軍する決意をしました。

海軍省から許可が下り、海軍御用船で外国人記者たちと共に黄海や遼東半島の前線を巡航しました。そして、西園寺公爵の協力によって陸軍省の許可が下り、乃木大将の第三軍に従軍しました。はじめは二週間だけの許可でしたが、大本営に従軍延長を申請して六か月従軍観戦しました。旅順要塞を攻撃する第三軍に、父の門人であった岡崎出身の土屋光春中将が師団長として任務しておられ、乃木大将、土屋中将にご挨拶して前線に出ました。攻めても攻めても落ちない二百三高地の攻撃、肉弾飛び散る戦いの様子を見ました。赤十字の旗を立て、敵も味方も、戦死したロシア兵、日本の兵士の遺骸を弔っている姿などを『大役小志』に書いています。志賀重昂全集で読むことはできます。日露戦争の戦記として高い評価を受けています。

日本やロシアだけでなく、世界各国から記者が従



第1回世界旅行中に母に出した手紙

軍して観戦し、戦争の様子を自国に報じています。志賀は外国人に通じる英語がしゃべれますので、イギリスやアメリカの記者やいろいろな国の記者と親しく交流していました。志賀が世界を旅する大きな要因になっていると思います。乃木大将と旅順口要塞総司令官ステツセル将軍との水師営の会見、旅順開城を眼前にして帰国しました。さらに、日本軍の占領下の樺太（サハリン）へ行き、樺太の北部を探検し、講和条約が結ばれると日露の国境の画定委員となって調査に当たっています。

また、沖縄や南大東島へ行ったり、日露戦争の見聞を全国各地に講演して巡わりました。明治43年3月、志賀47歳の時に第1回世界1周旅行をしました。大英博物館での日英博覧会に、郷土岡崎で見つけた南蛮屏風を出品していたこともあり、東京地学協会派遣、国民新聞の記者として、アルゼンチン建国百年祭と博覧会のセレモニー参加のために行きました。

これがアルゼンチンからお母さんに出した手紙のコピーです。地図が書いてあります。この世界旅行のコースですね。横須賀軍港から軍船「生駒」に乗って5月15日にアルゼンチンに着いています。「アルヘンチナ国迄到着いたし候　五月十五日。いよいよごきげんよろしく大慶千万に存じ奉り候」と読みます。点線のところが帰路の予定です。ブラジルのリオデジャネイロ、バイア（サルバドル）から大西洋を航海してイギリスへ行きます。イギリスからは軍艦を離れて一人旅です。志賀は、自分の見たいところを回ったのです。フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、スイス、イタリア、エジプトを巡遊して、シンガポールを経由して帰国しました。手紙のコースとは少し違っています。

「こんなに大手を振って旅行できるのは日露戦争に勝ったからだ」と志賀は強く感じています。「日本人は本当にエチケットを守らなければダメだ」といっています。紙に書いたものだけを重視し、信用して、口でいったことを軽く見る習慣があるが、口でいったことも、きちんと守らない限り信用されない、口でいったことを実行してこそ、その民族は信用され、尊重されるのだといっています。また、日本人は速さ、便利さだけを競争していて、正確、安全、ゆっくりでもいいから、きちっと守るということが大事じゃないかともいっています。今に通じる大切なことです。明治43年10月に帰国しました。100年前の第1回世界旅行については『世界山水図説』（全集第三巻）に書いてあります。

志賀は地理の本を書いています。『河及湖沢』（全集第3巻）『地理学』（全集第四巻）『国民当用世界当代地理』と『知られざる国々』（全集第六巻）などです。東大教授であった吉野作造は「この当時に外国の地理を学ぶのに、志賀先生の本ほど役に立ったものはなかった」といっています。自分の目で見て書いたのですから非常に参考になったのでしょう。第1回世界旅行後、早稲田大学の教授に志賀はなりました。

前にもどりますが、志賀が政友会に入党した頃、明治33年頃からですが、郷土への貢献についてお話したいと思います。この年の4月、志賀は岡崎商業会議所の特別会員に推薦されました。東京にいて、政治に言論に活躍しているので、中央の動き、経済の動向などの情報を送ってほしかったのと、同所代表として調査会や委員会に出席して活動してほしかったのです。二つの大きな貢献があります。

明治36年が、岡崎米穀取引所の継続の申請の時期でした。設立して10年になり農商務省に申請書を出す時でした。政府は取引所を縮小する方針でした。数を減らす方針です。会議所は志賀に協力を求めました。志賀は得た情報を知らせ、申請書について助言しています。騰貴だとか、利益ばかり考えないで、標準米をきちっとしておくこと、出す書類は分かりやすくコンパクトに書くこと、大げさに書いても担当者は現状を調査しておると書き送っています。岡崎米穀取引所は継続が認可され、昭和14年、戦時統制によって閉所されるまで存続しました。

もう一つは八丁味噌です。明治44年1月にドイツのドレスデンで万国衛生博覧会が開かれ、、八丁味噌を出品させるために骨を折ったのです。東京衛生試験所や水産講習所へ八丁味噌を送らせて、防腐方法や真空罐詰の方法について調査研究を依頼したのです。両所から出品しても大丈夫、よろしいという報告を受けて出品したのです。八丁味噌は万国衛生博覧会から賞を受けました。志賀は世界と岡崎、世界と日本を結ぶことを考えるのですね。スケールが大きいなという思いを深くしました。

日露戦争に勝って世界の一流国の仲間入りをします。そして、移民した日本人が排斥されるようになりました。よく働き、成果をあげますので、このまま受け入れていて良いのか、恐れが出てきたのです。アメリカのルーズベルト大統領の斡旋によって日露戦争の講和条約が結ばれました。日米はよい関係にありました。明治40年代になると、ハワイやアメリカの太平洋岸の、カリフォルニア州や南米のブラジルからも排斥の動きが出てきました。ヨーロッパや中国などから移民してきた人たちと日本から移民した人たちは競争になってきます。どんどん日本の移民。日本人はよい馬鈴薯、フルーツを作り、人口

も増加してきましたので、アメリカ政府も心配しだしました。太平洋のアメリカ海軍を増強しなければならないとさえ考えていました。志賀は現地を見に行きます。明治45年5月、カリフォルニアとハワイを視察しました。

志賀は現状を見て驚きました。日本人は道徳観念が低く、不潔だと新聞などに報じられていましたが、まったく違って、風紀は正しく、清潔で、職に応じて改良・工夫しており、現地の人々からは、とても評判がいいのです。日本人が一番犯罪や貧民が少なく善良だったのです。外務省の役人と向こうの役人との話し合いでは実態は見えないのですね。官庁や企業の依頼で行ったのではないので、生活の現状や一般の人々の声が見聞できたのです。排日は、もっと本質的なことから起きていると志賀は感じました。日本人は祖国のためという意識が強く、勤勉に働き、賃金は貯めこみ、父母や祖国のために送るが、住んでいる地域やその国のために尽くそうとしないことにあるのだと思いました。「日本人は米国の社会と融合する国民に非(あら)ず」と感じられていることだと思ったのです。

「日本人は絶えず戦争する。ハワイを占領しようと思っているのではないか」と質問されました。志賀は、江戸三百年の平和、泰平を語り「日本は決して軍国主義の国ではない」、国民は平和を愛しているとアメリカの人々に語っています。在留日本人に「まず良きアメリカの人民たれ」と講演しています。たちまち反発され、講演はボイコットされました。

私は昭和4年生まれですが、日本は不景気で満州事変、日中戦争（支那事変）、第2次世界大戦（太平洋戦争）の中を生きてきましたが、志賀と同じように、日本人は平和を愛する国民だと思います。「国粋」のことばが軍国主義の強調のために使われ、志賀を軍国主義者と誤解されている人もいます。

ハワイのマウイ島の教育会からの講演依頼と万国アメリカ会議出席のため、大正3年7月に横浜を出発しました。その時に、テキサス州のサン・アントニオ市に石碑を建てました。アラモ砦の殉難烈士の碑です。同じものではありませんが、岡崎公園にもあります。本丸の竜城神社の横にあります。長篠の戦いで武田勝頼が攻め長篠城が落ちようとして、鳥居強右衛門勝商(とりいすねえもんかつあき)が岡崎城の徳川家康のところへ伝令に来ました。援軍の依頼です。「疲れているだろうから城中で一泊して帰れ」といわれたのですが、一杯の湯漬を食べ、すぐに帰るのです。途中で武田軍に捕まえられました。「援軍はこないから早く降参しろ」と城に向かって大声でいえば、助けてやるし、重く用いてやろうといわれて、長篠城の前に引き出されました。勝商は「もう近くまで援軍は来ているぞ。もうしばらく頑張れ」と叫ぶのです。そして磔(はりつけ)になります。援軍がきて武田軍は総崩れになりますが、これと似たことが「アラモの砦」の戦いであったのです。

メキシコからテキサスが独立する戦いです。メキシコ軍がアラモの砦をとり囲み、陥落しそうな時、トレヴィスという兵士が本隊に伝令に行きました。本隊も苦戦で援軍は出せないのでしたが、トレヴィスも鳥居強右衛門と同じように、すぐ帰って司令官に「あなたと共に戦死するため帰ってきました」と援軍の来ないことを報告し、全員戦死しました。

このことを知った志賀が友好のため、分かりあえる証拠として石碑を建てようと思ったのです。「人間は、同じような感情を持ち、同じような気持ちで行動する」と強く感じ、人間は分かりあえるのだと思うのでした。

志賀は「日本に於ける米国人の功業」を書いたパンフレットを作り、アメリカの人々に配り感謝しています。ローマ字で知られるヘボン、日本の美術に尽したフェノロザ、札幌農学校のクラークなど政治、経済、科学などあらゆる分野から三十九人の日本への功績が書かれています。全集第八巻「最近旅行中の見聞」、第六巻「日本に於ける米国人の功業」で知ることができます。

志賀は国際理解、国際友好を求め、そのために尽力した国際人ですね。「正しいことは正しい」としてやっていかない限り日本の発展はないといっています。キューバやメキシコを視察して大正4年1月頃に帰国しました。

この年の4月に「徳川家康・本多忠勝両公三百年祭」が旧藩主を祭主に、志賀は祭典の副総長となり、盛大に意義深いものにしました。アラモの碑やこの国際友好の見聞を岡崎の人々に話しています。新聞や雑誌に排日問題とその緩和策、旅行の見聞を書き、講演しています。「米国人は相手の意見を一たび正義なりと悟れば『ユー・アール・ライト』（君は正しい）といい得る国民である。日本人は卑屈にならず、公明正大に行動し、君は正しいといわしめることが大切である」と訴えています。

第一次世界大戦が終結すると、「民族自決」が世界の趨勢となってきたのですが、一方、人種差別が厳しくなってきました。有色人種への差別は南アフリカ連邦からオーストラリア、アメリカ合衆国へと広まります。日本に対しては、列強特にアメリカは警戒感を深め、太平洋岸の国防を強化しています。志賀は、人種差別の実情と移民の適地を探す旅行をしようと決心しました。南アフリカ連邦、南米諸国、

メキシコを視察する、自ら決した現地踏査です。これを第二回世界旅行といっています。大正11年8月出発しました。有色人種でイギリスやアメリカ、フランス、ドイツとほぼ肩を並べる国は日本だけですので、志賀は、すこしでも人種差別をなくしたいと思っていました。

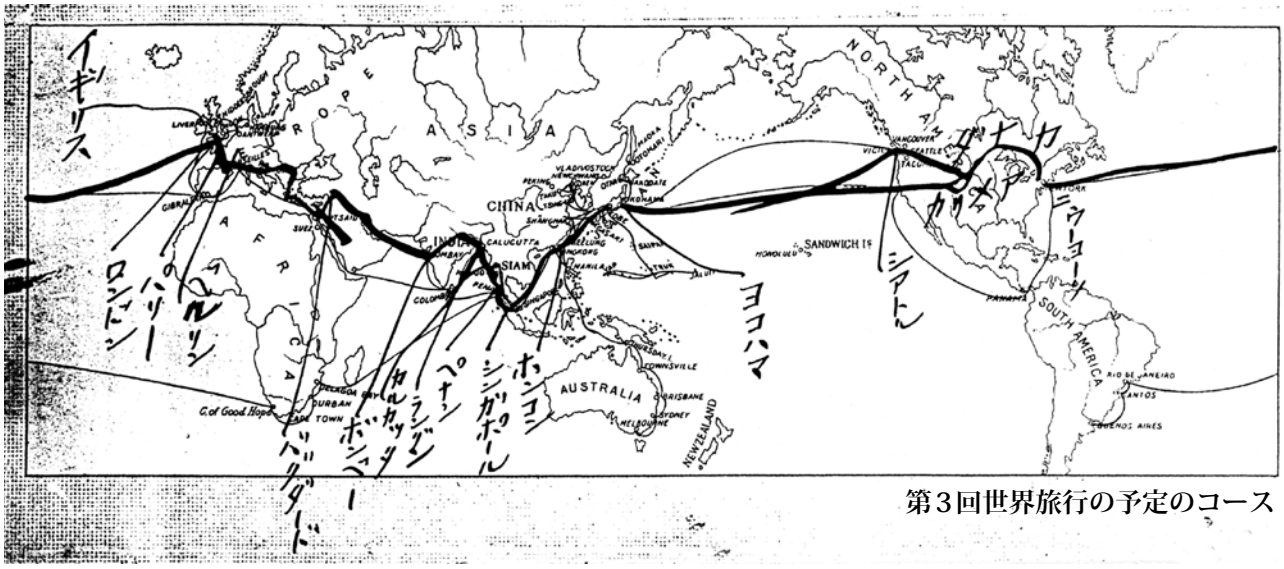
南アフリカ連邦のダーバンからピーターマリッツバーグに9月20日着きました。その時のことですが、志賀が汽車に乗ろうとしたら「おいおいお前、黄色人、もとへ戻れ、国内へ入ることはできないのだ」といわれて、移民取調所まで引っ張られたのです。旅券を出すと国内の旅行はできないからダーバンまで帰るようにいわれました。志賀は、イギリス王立地理学会名誉通信会員証と南アフリカ連邦政府の内務大臣の紹介書を見せました。大正6年、志賀54歳の時に推薦されました。係官の態度は一変し、志賀は快適に南アフリカ連邦内地を旅行しました。ダイヤモンド鉱山や金の産出地を見て、首相のスマッツ将軍と会見しました。民族の差別はなくすべきだと話し合っています。南アフリカからブラジル、アルゼンチンそして、パラグアイ、チリ、ペルー、パナマを見察してメキシコに行きました。

アンデス山脈を越えてチリ北部に向かう時、志賀は大きな衝撃を受けました。大正11年11月30日のことでした。白人が谷間で掘っているのです。聞くと「石油を探しているのだ」というのでした。志賀は「此の世界は全く石油是力たる時代となった」といっています。欧米の人は、こんなところまで来て石油を探索しているではないか、日本の石油についての対策はどうなっているのかと強く感じて帰国しました。ブラジルの南部やメキシコで移民の適地を見つけていますが、志賀の心は産油への旅になっています。

3月に帰ったのですが、国内では石油問題についての関心はとてもうすかったのです。1日でも早くアジアの産油地のイラン、イラク、クゥートなど中東へ行きたかったのですが、大正12年9月1日、関東大震災が起き、旅費の調達どころではありません。今までは、招待や軍艦に便乗し海外旅行の費用はあまり要らなかったのですが、今度は、そうはいきません。郷土の岡崎へ来て、親しい人々に石油の重要性や中東旅行の大切さを熱く話したのです。「岡崎の人々は志賀先生のいわれることなら」と協力をおしみませんでした。秘書役の後藤狂夫の『我郷土の産める世界的先覚者志賀重昂先生』に拠出した人々の名前が列記され、「自書の揮毫を頒ち合計一万余円を調達し先生をして其志を遂げしめた」と書いてあります。これは、志賀の郷土への貢献と郷土の人々との親しい交流があったからのことです。大正12年12月26日神戸港を出発したのです。

私にも嬉しいことがありました。この旅行を第三回世界旅行といっていますが、この旅行中にお母上に出した絵ハガキを見付けました。40枚近くありました。（コピーを『岡崎市史研究』（24号）に採録しておきました。）

志賀が旅行したところから出しているので旅行したコースが分かるのです。感動しました。志賀は筆まめでした。ホンコン、シンガポールを経てビルマ（ミャンマー）、インド、オーマン、イラン、イラク、シリア、ヨルダン、イスラエルを巡遊しました。知らない国々の一人旅ですので心配していましたが「亜刺比亜（あらびあ）は開心であった。予は有（あら）ゆる人々より歓待せられた」といっています。オーマンとケラク（ヨルダン）では国王に面会しました。イスラエルが建国したばかりで、ずっと住んでいたアラビア人とユダヤ人が対立しているところも見ました。アバダン



第3回世界旅行の予定のコース

第3回世界旅行中に母に出した絵ハガキ

で製油工場を、空高く汽笛をならして往来するイギリスの油槽船を見て「油断大敵」というが「油断国断」の時代がくる、日本国家の生存問題となるといっています。

中東からエジプトへ、地中海を渡ってギリシアへ行きます。『知られざる国々』には、神戸出港からギリシアまでの見聞や感想が記してありますが、それ以後の旅程は、お母さんに出した手紙の地図と絵ハガキで知ることができました。ギリシア、トルコ、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、オーストリア、チェコスロバキア、ドイツ、フランス、イギリスを経て、アメリカを横断鉄道で太平洋岸に着き、シアトルから大正13年7月10日横浜港に帰りました。半年にわたる世界一周旅行でした。「坤輿放歌行」（全集第七巻）の二つの詩とその説明によって、僅かに志賀の思いや気分がわかってきます。志賀は、アジアの振興、啓発をする義理、任務があるが「大亜細亜聯盟だの、大亜細亜主義などと云うことを首倡（しゅしょう）するのは大局の明なき徒である」と主張し、決してアメリカと戦争してはならないと叫んでいます。

この第3回世界旅行の旅費は郷土の人々が拠出したのです。千賀千太郎、深田三太夫、早川久右衛門はじめ多くの人々が支援したのです。志賀は、これに何としても報いなければと思っていました。インドやビルマなど佛跡を巡り、収集できるものを集めてきました。老いも若きも楽しめる公園を考えていたのです。近くにお寺のある公園です。今の東公園です。整地がはじまっていましたが、急に病気で志賀は64歳、昭和2年4月6日に他界します。タイの若き釈迦像が東本願寺別院に仮に安置されています。当時の岡崎市長本多敏樹をはじめ知人が「釈迦堂」だけでも建立しようと活動しました。志賀が心に描いた公園と寺ではないかも知れませんが、一応、志賀の感謝の志が実現されました。

時間がきておりますので、これで終わります。後半取り急ぎましたのでわかりにくいところも多々あったかと思いますが、ご静聴ありがとうございました。

差出地　フランス・パリ